

日出ずる、信濃から

日出ずる、信濃から

小池茂治



小池茂治の一生

感謝と愛を込めて

小池茂治。

昭和二四年、長野の地に生まれた一人の男が、
なぜ生前から自分史を作ろうと思いたったのか。

ゝ入院したときに、病室のベッドの上でね、ふと考えたんだ。

脳梗塞、心筋梗塞になったのに、喋れないとか、寝たきりにならずに済んだ。

この命びろいに感謝しなくなったんだ。

そしてね、今まで世話になった人のことを、自分史を作りながら

思いを馳せてみよう。感謝の気持ちを伝えたかった。

小池にはもうひとつの思いがある。

ゝ自分が社長になって何年もたつが、今でも不思議に思うことがある。

自分の家系には商売人が一人もいない。

なのに、どうしてここまで商いへの興味が尽きないのだろうか。

そんな自分の数奇な人生を、自分のためにも振り返っておきたかった。

そして、自分がこの世からいなくなったときに、

孫たちに伝えられるものを残しておきたかった。

「目配り、気配りができる人」になれと言っても、

たとえ遺言書に書いても、

それだけでは伝わらないだろうから。

姉(静枝)と(1950年)



旧家の畑で家族と
(1950年)



(1952年)



元気で若い頃の父母(1952年)



姉(静枝)と(1953年)



父、静枝、みさえと(1954年)



(1952年)



小学校入学式の日 於 自宅前道路(1956年)

雨の日も、 雪の日も、 嵐の日も。

紫色の薄闇から、南アルプスの山際がうつすらと見えはじめる頃。

小さな新聞店で一人の少年が黙々と、任された新聞の仕分けをしていた。

彼の名は小池茂治。小学五年生になったばかりだった。時は昭和三五年。「所得倍増計画」を掲げ、カラーテレビの放送が始まり、日本は少しずつ経済的豊かさを享受しはじめていた時代。

遊びたい盛りの子供が、朝早く起きて新聞配達をするといえは、理由を見つけるのは容易だ。

働き盛りの父親が体調を崩し入院、母親は看病につきっきりとなり、家庭は一気に貧しくなったからだ。

厳格で何事にも厳しく、生真面目な会社勤めの父と、日雇い仕事で家計を助けた気立ての優しい母。その二人がいつも口にしていた言葉がある。

「人様には挨拶を忘れないこと。また、人様に笑われないよう、普段は儉約しても義理を忘れずきちんとすること」が口癖であった。



於 父母姉妹と家の畑の前(1954年)



於 自宅前(1956年)



於 自宅前(1956年)



妹(みさえ、幸子)の七五三
於 南宮神宮(1959年)

その言葉を聞いて育ったことも影響したのか。

姉と二人の妹と自分。自分が男として一家を支えなくてはと、気づいたら近所の中川新聞店の前にいた。

チラシと新聞をセットし、自転車の荷台に積む。一日二〇〇軒、二時間かけて、朝日、読売、地元紙の各新聞を一件の間違いもなく契約者宅に届けた。

どのルートが効率がいいかを考え、犬がいる家では吠えられてクレームがくることのないように、細心の注意を払った。

ある家主からは、俺が出勤する時間よりも前に確実に届けておくと命令されることもあった。小池は契約家庭の様々なリクエストをすべて記憶して届け続けた。

雨の日も、雪の日も、嵐の日も。



松本城への家族旅行(1954年)



辰野病院に入院中の父(左上) (1961年)



保育園の庭にて(1953年)



七五三のお祝 於 南宮神社(1954年)



於 庭先(東京のおじさんに撮ってもらった 1957年)



萱野高原にてキャンプ(1962年)



若かりし頃の父母(1959年)

そうして苦勞して得た収入はどのくらいであったのか。

一ヶ月あたり一〇〇〇円ほど。家計を助けるほどのものではなかったが、小池にとってはただ単に報酬を得るだけのものではなく、

普段の両親の頑張りを思えば、わずかでも何かの役に立てている自分がいることに満足であった。

妹の運動会が近づけば、運動靴はちゃんとあるのか？

と自分のものは後回しにして買ってあげるのだった。

小池の頭の中には、自分の父親は、もしかしたら早くに死ぬのかもしれない、という恐怖が常にあった。そのため毎日の生活は、遊びよりも、何よりも、新聞配達と学校。そして明日に影響せぬよう、晩ごはんを食べたら早く寝るという規則正しい生活が身についていった。

でも、小池は堅物な聖人君子などではない。ごく普通の小学生だ。

夏休みになれば、スイカやぶどうをちよいと畑に入っては、こっそり食べたり、近くを流れる天竜川でフナやコイ釣りをしたり。

子供らしいこともたくさんした。



箕校駅伝 塩嶺峠を岡谷市役所までくだる(高校2年)



インターハイ1500m決勝(1966年)



箕輪工業高校陸上部長距離 同一年齢メンバーと顧問(1968年)

中学・高校時代では走ることになった。
箕輪町で行われる町内一周駅伝には毎年参加。
公民館で行われる約一ヶ月間の練習にも毎日参加して、タイムをのばした。小池はのちにOBとして監督も務め、輝かしい一〇連勝を達成した。



妹2人(みさえ、幸子)と(1966年)

入りたい会社は決まっていた。

これでふん切りがついた。こうなれば、地元で一番の大きな会社に就職するぞ、と決意を新たにした。

小池は、粘らなかった。

本当にすまない」

うちを助けて欲しい。

お前には悪いが、高校を出たら就職して欲しい。

あの先祖から受け継いだモノを手放すことは、俺には出来ない。

「茂治すまん。あれを売ることは…

すると父親は、少し考えてから……

学資にしてくれないだろうか」

あの先祖代々受け継いでいる土地を売って

箱根駅伝にも出てみたい。

今みたいに陸上部に入って、

「おやじ、俺大学に行きたいんだ。

ある夜、勇気を出して父親に言った。

でも後悔はしたくない。

家庭の事情を考えたら、大学進学は厳しいのは分かっていた。

小中学校九年間皆勤と休まず新聞配達を続けた。

高校に入ってしまったら、父の体調も徐々に回復に向かい、通常の生活リズムとなっていく。それでも小池は卒業するその日まで、



修学旅行関西方面(17歳のとき)

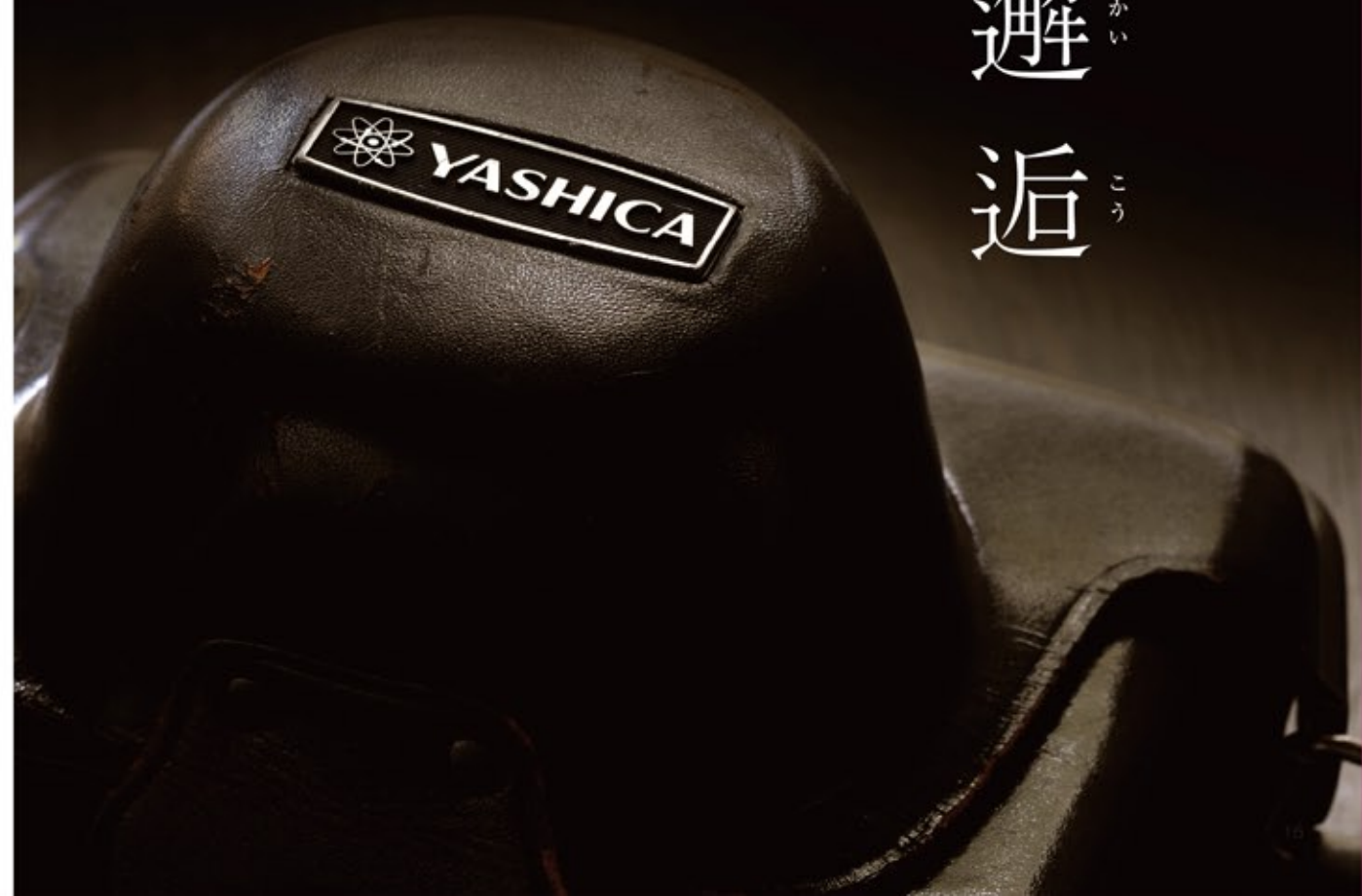


入社250名 内男20人(1968年)

ヤシカ。

長野県諏訪市にて創業、のちに京セラになる、
当時国内トップのカメラ・精密機械の会社に就職した。

ヤシカとの邂逅 かいこう





信越駅伝 3区トップ争い(1969年)



長野県立箕輪工業高校 陸上部全員(1967年)



入社を終え、配属職場での撮影
社会人としてのスタート(1968年)

進学を家庭の為に諦めた小池。

だがそこに、悲壮感はなかったという。

なぜなら、新聞配達を八年間続けた男に、

神様は走りの才能を与えていたからだ。

自転車で毎日二〇〇軒の家々を回っていたのだから、

足腰を中心に、類い稀な筋力がついたのだろう、

小池はすさまじく健脚だった。

入社してすぐに、信濃毎日マラソンにヤシカ所属とし

て出場し、二時間三五分という優秀なタイムを叩き出し

見事に入賞。新聞にその名を残した。

信濃毎日マラソン成績

順位	氏名	所属	時間
1	田んぼ	信濃毎日	24分00秒
2	辰野	信濃毎日	24分05秒
3	佐々木	信濃毎日	24分10秒
4	山田	信濃毎日	24分15秒
5	鈴木	信濃毎日	24分20秒
6	高橋	信濃毎日	24分25秒
7	中村	信濃毎日	24分30秒
8	小川	信濃毎日	24分35秒
9	渡辺	信濃毎日	24分40秒
10	山崎	信濃毎日	24分45秒
11	佐藤	信濃毎日	24分50秒
12	松本	信濃毎日	24分55秒
13	小林	信濃毎日	25分00秒
14	高田	信濃毎日	25分05秒
15	山本	信濃毎日	25分10秒
16	佐々木	信濃毎日	25分15秒
17	中村	信濃毎日	25分20秒
18	小川	信濃毎日	25分25秒
19	渡辺	信濃毎日	25分30秒
20	山崎	信濃毎日	25分35秒
21	佐藤	信濃毎日	25分40秒
22	松本	信濃毎日	25分45秒
23	小林	信濃毎日	25分50秒
24	高田	信濃毎日	25分55秒
25	山本	信濃毎日	26分00秒
26	佐々木	信濃毎日	26分05秒
27	中村	信濃毎日	26分10秒
28	小川	信濃毎日	26分15秒
29	渡辺	信濃毎日	26分20秒
30	山崎	信濃毎日	26分25秒
31	佐藤	信濃毎日	26分30秒
32	松本	信濃毎日	26分35秒
33	小林	信濃毎日	26分40秒
34	高田	信濃毎日	26分45秒
35	山本	信濃毎日	26分50秒
36	佐々木	信濃毎日	26分55秒
37	中村	信濃毎日	27分00秒
38	小川	信濃毎日	27分05秒
39	渡辺	信濃毎日	27分10秒
40	山崎	信濃毎日	27分15秒
41	佐藤	信濃毎日	27分20秒
42	松本	信濃毎日	27分25秒
43	小林	信濃毎日	27分30秒
44	高田	信濃毎日	27分35秒
45	山本	信濃毎日	27分40秒
46	佐々木	信濃毎日	27分45秒
47	中村	信濃毎日	27分50秒
48	小川	信濃毎日	27分55秒
49	渡辺	信濃毎日	28分00秒
50	山崎	信濃毎日	28分05秒
51	佐藤	信濃毎日	28分10秒
52	松本	信濃毎日	28分15秒
53	小林	信濃毎日	28分20秒
54	高田	信濃毎日	28分25秒
55	山本	信濃毎日	28分30秒
56	佐々木	信濃毎日	28分35秒
57	中村	信濃毎日	28分40秒
58	小川	信濃毎日	28分45秒
59	渡辺	信濃毎日	28分50秒
60	山崎	信濃毎日	28分55秒
61	佐藤	信濃毎日	29分00秒
62	松本	信濃毎日	29分05秒
63	小林	信濃毎日	29分10秒
64	高田	信濃毎日	29分15秒
65	山本	信濃毎日	29分20秒
66	佐々木	信濃毎日	29分25秒
67	中村	信濃毎日	29分30秒
68	小川	信濃毎日	29分35秒
69	渡辺	信濃毎日	29分40秒
70	山崎	信濃毎日	29分45秒
71	佐藤	信濃毎日	29分50秒
72	松本	信濃毎日	29分55秒
73	小林	信濃毎日	30分00秒
74	高田	信濃毎日	30分05秒
75	山本	信濃毎日	30分10秒
76	佐々木	信濃毎日	30分15秒
77	中村	信濃毎日	30分20秒
78	小川	信濃毎日	30分25秒
79	渡辺	信濃毎日	30分30秒
80	山崎	信濃毎日	30分35秒
81	佐藤	信濃毎日	30分40秒
82	松本	信濃毎日	30分45秒
83	小林	信濃毎日	30分50秒
84	高田	信濃毎日	30分55秒
85	山本	信濃毎日	31分00秒
86	佐々木	信濃毎日	31分05秒
87	中村	信濃毎日	31分10秒
88	小川	信濃毎日	31分15秒
89	渡辺	信濃毎日	31分20秒
90	山崎	信濃毎日	31分25秒
91	佐藤	信濃毎日	31分30秒
92	松本	信濃毎日	31分35秒
93	小林	信濃毎日	31分40秒
94	高田	信濃毎日	31分45秒
95	山本	信濃毎日	31分50秒
96	佐々木	信濃毎日	31分55秒
97	中村	信濃毎日	32分00秒
98	小川	信濃毎日	32分05秒
99	渡辺	信濃毎日	32分10秒
100	山崎	信濃毎日	32分15秒

第12回 信濃毎日マラソン
1969年(昭和44年)3月23日 出場選手199人

田んぼからも声援

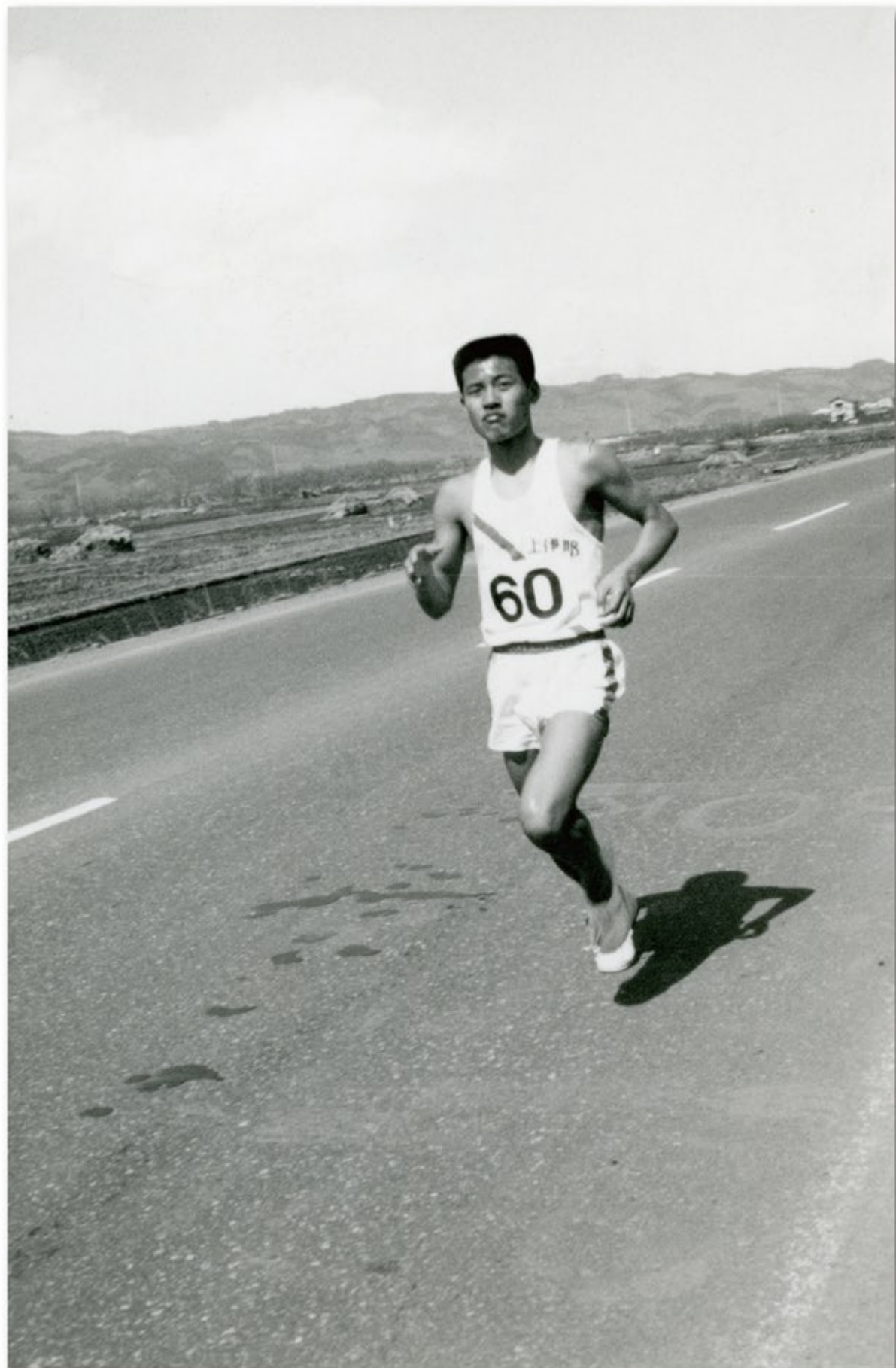
辰野勢はおんべて激励

信越駅伝

白熱のレース 田んぼから声援を受ける選手たち。背景は信越駅伝のコース。田んぼの風景が印象的。



各大会の優勝カップ及び旗 次年度大会には全て返却しなければならないため記念撮影(24歳の頃)



その大会に出場したトップレベルの選手の中には、東京オリンピックにも出場した寺沢徹選手も参加していたというから、そのレベルの高さが測り知れる。

当時はペットボトルの水などはない時代、給水ポイントではなんとヤクルトが配られたという。

小池は手元が狂い、そのヤクルトが顔にかかってしまい、ろくに水分もとれないまま、顔じゅうベトベトになってゴールした。「今じゃ考えられないよね」と笑って話してくれた。

そして「もしあのとき二時間三〇分を切っていたら、人生が変わっていたかもしれないけどね」とつぶやいた。

地元を愛した小池は、精密機器のヤシカと出会った。

それはのちに、彼の人生を決定づけていく。

小池茂治の十代は、苦楽とともに信濃の国を駆け抜けていった。

仕事の虫



ヤシカ。その名は、今でもカメラ愛好家の間では興味深いブランドだ。昭和四〇年には、世界初の電子制御式カメラ「ヤシカエレクトロ35」を発表。暗いところでの撮影が困難で、壊れやすいとされていた当時のカメラのイメージを一新したとされる。この機種は、その後も売れ続け、シリーズ累計販売台数が世界で約五〇〇万台に達するベストセラー機となった。

小池が入社した昭和四三年には、長年ヤシカにレンズを供給していた富岡光学器械製造所（昭和四四年に「富岡光学株式会社」に改称、現・京セラオプテック株式会社）を、子会社化するまでの大企業になっていた。瞬間を切り取る、精密なメカ。人々に憧れられるカメラメーカーとして魅力にあふれていたヤシカ。

働くことが生きること、と言わんばかりの若き小池は、水を得た魚のよう

うに仕事にのめり込んでいった。

入社当初配属された部署は、生産管理部門だった。体力勝負のみでなく、文字どおり目配り、気配りが最優先される仕事内容だった。

ヤシカ全体での社員は二〇〇〇人、二五〇〇人いたが、自分の業務を遂行するために関わるのは、生産管理部門を含めて一〇〇人足らず。だからまず、この一〇〇人に自分を知ってもらい「お前のためならしょうがねえか」と言ってもらえる人間関係を作るのが大切だと思った。まずは大きな声で挨拶をする、ということをして励行していた。

小池は、新聞配達で覚えた「効率よく仕事をする」ということが、嫌なほどに身についていた。数種の新聞を、間違いない時間内に届けることを、八年間毎日やり続けていたのだから。そして、小学六年生のときには、一学年後輩のミスや手際の悪さを、説教していたというぐらいだ。

その経験のおかげもあり、利益の計画立案やスケジュール管理など、得意とする仕事が多かった。

主な業務内容は、新機種立ち上げのスケジュール立案、年度毎の事業計

画立案に伴う利益計画、設備・生産能力不足に伴う設備投資費について、勤務形態、二・三交替勤務に伴う採算性など、様々な経営・経済的有意性の提言。他にも生産現場からの様々なクレーム、アラートに日々対応することも並行して行っていた。そのため、主たる業務と懸案事項を毎日一五〇項目くらいは常に抱えているような状態だった。

特に、新機種の立ち上げに関しては、今後の社運を左右する重要な案件のため、計画どおり進められなかった部門長が突然平社員に降格させられるといった事例もあった。喧々譁々の渦の中に、いつもいるような感覚だった。

小池は、生産管理部門の人間として、給与の五倍位は稼ぐように同期や後輩に提案し、職場と自分自身の存在価値を維持できるよう、それを常に意識、実行していた。

ヤシカには、当時一流大学を出た新卒もたくさん入社していたが「学卒には負けない」といつも気を張っていたという。

「出る杭は打たれる」



梅が咲きほこり、春めきはじめたある日の仕事帰り。小池が一目置いて
いる先輩と、下諏訪御田町の居酒屋で呑んでいたときだった。

酒を一口か二口、口につけたところで、その先輩は急に神妙な顔つきに
なった。

「小池。お前には、公示の前に早めに言っておく。俺は来期から香港工場
に出向だ。一応、肩書きの上では最高責任者、工場長ってことになってい
るけど、いわゆる左遷だよ」

小池はあまりの衝撃に、酒をこぼしそうになった。

「本当ですか。信じられません。今の仕事誰が引き継ぐんですか。
先輩が築いた人脈を、ちゃんと継承できる人なんていませんよ」

「お前ならできるよ。」

会社の上層部が何を考えているか知らないけどな、俺は一切、上におもねらなかったからなあ。可愛くなかったんだろうよ。お前も熱いし、意志を曲げないのはいいけど、ある程度は、ハイハイって上の言うことも聞かないと、俺みたいに飛ばされるぞ」

そういつて、いくつかのアドバイスをくれたその先輩は、下諏訪工場から去って行ったという。

その先輩のアドバイスでまだ覚えていることがある。「上司と話すときに大切なのは、冒頭は上司の話をよく聞き、まずは『言われたことは、よくわかりました』と一旦は肯定する中で、しかし〇〇の理由でこう思いますがどうでしょうか、と自己主張したらいいよ」と。

さらに、「二〇代で忙しいというのはとてもいいぞ。三〇・四〇代になってから新しいことをたくさん任されたときに、パニックにならないよう、今があるんだよ」と。

小池はこのときの先輩の言葉がずっと心の中にあった。自分がのちに起業し、一ヶ月の総売上が一〇億円に達したときも、経理の人間や周りには、無謀だなんだと色々と言われたけれど、幼少期の新聞配達や、ヤシカ時代の苦労した経験が活きているのではないかと顧みることがあるという。

それ以降毎年、毎年、春になると、居酒屋で異動の話を告白された。

小池が尊敬している人ほど、上に嘯み付いて、結局は飛ばされる、ということが繰り返された。

そういう状況の中で、日々の仕事に邁進しながらも、自問自答の日々が始まった。仕事の出来ない人が飛ばされるのは、わかる。会社はボランティアではないのだから。ただ、出来る人が飛ばされるのは、納得できない。ろくな業務実績も残せないのに、ごますりだけが上手な人が偉くなっていく企業に、未来はあるのか。

効率よく、稼ぐ。そのための努力はする。しかし、間違っていると感じたことは、上だろろうが、下だろろうが、はっきりと言う。自分もこのままでは、尊敬していた諸先輩のように、いつかは営業所や工場に飛ばされてしまふのだろうか。

今はまだ、独身だからいい。しかし、いつか結婚して、子供もいるときに、どこか遠方に飛ばされたり、減給となれば、さぞかし惨めだろう。

小池は、タッグを組んだ上司が飛ばされるたびに、燃え尽きてしまったような、虚無感、脱力感におそわれることが年々増していったという。

幼い頃からの自分の性格を顧みると、敬えない上司の命令に、ハイハイと生返事ができるタイプではない。

そんな小池らしいエピソードがある。

よく働き、そのぶんよく呑んだ小池。同僚と呑みに行けば、みんなの愚痴を聞き、自分も不条理だと思えば、それは間違っているよとなだめすかし、励ましていたという。

ある時、チームの不満が一致したので、それを吸い上げてまとめ、本社長に直に進言するという事件をやったのけた。もはやヤシカ社史の伝説だ。

部長会議の席上、社長が言った。「生産管理には小池という者がいるが、随分元気がいいな」と。当時の上司は相当肝を冷やしたことだろう。



「当時もうベテランになっていた俺は、懷にいつも辞表を携えているような気持ちだった。いつでも辞めてやる、そのかわり妥協も遠慮もしないぞ、という気概で仕事をしていた」

まさにサムライ、働く戦士だ。今の若者の、上司に怒られたらすぐ辞める、という感覚の「辞表」とは全く別のものだ。

カメラを売る、稼ぐ。それは楽しいことなのに、伸びよう、新しいことをしようとする、上から打たれる。小池は、いつかヤシカを辞めることを念頭におきながら自分の人生を模索していった。

四〇代後半から五〇代の、経験を積んだ先輩たちは、住宅ローンを組んでマイホームを建てていた。子供たちは大学受験があるから教育費もかかるという。だから、だろうか？ 彼らは社内の会議では、意見を上層部から求められても、目線を下げ、終始何も言わない。

左遷されたら困るからだろう。しかし、小池の尊敬する先輩たちは、持論を主張し、企業としてどう判断すべきなのかと進言をしていた。

自分の三〇代、四〇代、五〇代のライフサイクルを考えたとき。両親もいつまでも丈夫ではない、年老いていくだろう、結婚もしたい、子供も欲しい。家族を繁栄させるために、たった一人の男兄弟として何をやるべきか。このまま勤め続けても大変だし、自分で独立するのはきつともっと大変だろう。どっちがいいかなんて、誰も教えてくれないし、誰にもわからない。すべて自己責任なんだなと。こんなことを考えている矢先に、読売ジャイアンツ長嶋茂雄が引退した。

「みなさん、ありがとう。燃え尽きました。読売巨人軍は永遠に不滅です」とスピーチした。

それを見て思った。自分もいつかこの世を去るときに「燃え尽きました」といって心置きなく男として終焉したい。そのためには、より困難な道を選びべきなのではないか、と。

その後ヤシカは、小池に未来を危惧させるに余りある変貌を遂げていく。

小池の予想通りといつては過言だが、昭和四九年には業績が悪化し、大幅な人員整理をはかった。相模原工場は閉鎖に追いこまれ、労働組合委員長、工場長が相次ぎ割腹自殺を図るという社史が残っている。

そして小池は、昭和五二年、ヤシカを去った。

つまり、大幅な人員整理、工場閉鎖のあとも小池が会社に必要とされていた人材だったことがうかがえる。

なんといつても小池は、成績優秀な社員だけに贈られる社長賞を授与されているのだから。彼は今でもその大きな賞状を、自分の書齋に飾っている。

「今となつてはなつかしいよね。ヤシカでは若いうちから色々な経験と、試練を与えてもらえたし、あのとき出会えたすべての人に、感謝の気持ちでいっぱいなんだ」

好きな会社を辞めるときの、小池の心中はいかほどのものだったのか。

「退職金は九〇万円くらいもらったよ。今の価値でいくらなんだろう。当時の俺には、大金だったよ。九年勤めたからねえ。まだ独身だったけど、両親、姉・妹、親戚、全員から反対されたけど、なんか啓示があつてね。先輩たちを見ていたら、先が見えてしまったよね。長嶋茂雄の言葉にも影響されたかな。」

でも、未だに覚えているけど、やめた日から一〇日間はずっと家で寝込んでいたよ。死んだように寝続けたって言葉あるよね。とにかく、辞めることを決めることが精一杯で、精神的疲労も頂点に達したのかな、本当に燃え尽きたんだろうね」

両親にも自分の決意を伝えた。「俺は丈夫な身体をもらいました。だから、めいっばい働きます。そして、両親の口に入るものを絶やすことは絶対にしませんから、思う存分やらせてください」

上司に愛され、部下に慕われ、会社には表彰までされた、愛社精神の権化のような男。

ここで、忘れずに記しておきたいのが、どんな功績で、優秀社員表彰を受けたのかということだ。それは、一四棟から成る、三〇〇坪の工場内のレイアウト業務を敢行したことだった。

金属、棒材、板材、の素材一次加工を経て、二次加工、鏡面仕上げ加工、穴あけタップ加工、ローレットなどのネジ切り加工、そしてメッキ塗装などの表面加工を経て、組立ラインに投入される工場の、高効率で無駄のないレイアウトを作り上げるミッションだった。

カメラ製品完成までの動線に無駄が出ないようにするためには、ある程度、工程をグループ化して大枠でとらえ、関連した作業及びスペースを集約しなければならない。また、長期技術ビジョンの中で、会社として力を注ぎたい技術部門と、設備計画とのバランス、さらに、各部署、各課、各係それぞれの考えを協議し、とりまとめ、決定していかなければならない。

配置レイアウトを決めていくことは、本当に奥が深く、難しいものだと言え、確認し、邁進する日々だった。

土日も休まず、徹夜も続き、六三kgあった体重が徐々に痩せて、五〇kg台になる日も出ていた。

レイアウトも決まり、機械が並んだときは、まるで自分の家のような愛着がわき、寝泊りさえしたくなるほどだった。

それほどまでに会社を愛したぶん、のちにヤシカが倒産し、子会社だった京セラに吸収されるという惨めな姿を、目の当たりにしたくなかったのだろうか。小池の先見の明は、その姿までとらえていたのではないか。

「男はね、家族のことを最優先に考えなければいけないんだ。

自分を育ててくれた両親のこと、最愛の妻と可愛い我が子、小池家の将来のこと。だから常に、五年先、一〇年先を見つめて、生きていかないとはいえないんだよ」



小池製作所、 誕生。

会社員の男が辞表を出して、独立する。

『独立』

後戻りのできない、重みのある言葉だ。

高度成長期以降は、脱サラ、などと軽く言う風潮もあったが、小池が辞表を出した昭和五〇年代では、よほどの決意がないと辞められるものではなかった。しかも、一部上場大手のカメラメーカーを退社し、自分でビジネスを始める。言うは易しだが、本当に食べていけるのか、お嫁さんはもらえるのか、誰もが懐疑的になるものだ。しかし、小池は数年に渡り考えぬいていた。そして辿り着いた結論だった。

「辞めます」

伝えたとき、上司から飛んできたゲキは、今も耳にこびり付いて離れない。

「お前ってやつは、何をぬかしてる！ 世の中そんなに甘くないぞ！」

だがしかし、こう怒鳴られたときにはもう腹は決めていたので、全く動じなかったという。



当時、小池の月給は八万五〇〇〇円だった。大卒初任給の平均が六万七万円の時代だがそれは、六年〜七年間上がらない状態を示していた。

ある夜のこと。翌朝に始まる定例部長会議用資料を作成していたら、深夜までかかってしまっていた。通勤距離が三〇km近くあるため、そのまま仕事場で睡眠をとろうと決めた矢先、コツコツと響く足音がする。ガードマンの見回りだった。慌てて机の下に隠れ、懐中電灯の明かりが通り過ぎるのを、息を潜めて待った。

翌朝、大量のタバコの吸殻を見た先輩が、ちゃんと残業代の申請を出しているのかと労ってくれた。小池は、そうですね、と笑いながら答えるだけで、実は申請もろくにしなかった。

そんなことも厭わないほど、ヤシカの仕事にやりがいを感じていただけに、辞めるということを決めることが本当に一大事だった。

家族、親戚、みんなの反対を押し切って辞めるからには、絶対に成功させる、絶対に後悔しない。と、意気込みだけはあったが、次の仕事が全く

決まっていなまま辞めたというから、驚きだ。

最初の仕事は何だったのか。どんなスタイルだったのか。

「まずは、親と住んでいた実家の自室で、仕事を始めたんだ。リズム時計さんという会社の製品の、アッセンブリーを組み立てるという内職の延長みたいな小さな仕事をね」

この会社とはヤシカ時代に取り引があり、自分が辞めたことを聞いて、仕事をふってくれたという。納期に対するさばかねばならない量もまちまちで、多いときは本当に内職のおばさんに頼みながら、ドライバー一本で、コツコツと始めた。

いつ寝たのか、いつ起きたのかさえわからないような日々が続いた。気づいたら、工具を手にしたまま朝を迎えていたこともあった。だから、今の人たちの働き方改革とか、ちょっと生ぬるいかなと感じることもあるという。

日中は納品物を届け、知り合いを伝って営業。午後から深夜は、ひとり



妹(幸子)の結婚式 於 伊那式場(1979年)



父の定年退職祝い 於 自宅(1979年)

で組み立て仕事に没頭する。そんなときは、ラジオだけが友達だった。

「オールナイトニッポンだよ。当時は、笑福亭鶴光さんとかかなあ。あと、大石吾朗の番組も聞いてたよ。聞いているとなんか元気がでるよね。」

番組が終わったと思ったら、コケコッコー！って鶏の鳴き声が聞こえてきて。もう朝かあ、これ間に合うかなあってね」

寝て、食べる、以外は仕事づけの日々を三年、四年。仕事を選び好みせず引き受けていたら、転機がきた。部品を組み立てる、という内職レベルではできない仕事だった。カメラのレンズズーム部分のヘリコイド加工の仕事だった。研磨剤でラップし、ホワイトガソリンで洗浄後にグリスを塗布。作動時にザラザラ感のない、スムーズな動きに仕上げるための仕事だった。まさに、カメラという機械の要ともいえる部分の仕事が舞い込んできた。

この仕事を請け負うようになってから、六〇万〜七〇万円前後の手形が残るようになった。

「俄然、楽しくなってくるよね。仕事量も増えるし。だんだん自室を飛び出して、庭先まで広げてやっていたら、通りがかった先輩が、部品や機械が丸見えだから簡易的建材で囲えばいいよと、トラックいっぱい積んで持ってきてくれたんだ」

でも、やっぱりこの半端な囲いでは、大切な機械を守れない、どうしたらいいのかと悩んでいた。すると、父親が、金を出してやるから庭先にプレハブの小屋を立てたらいいと申し出てくれた。

三〇〇万円。

自分が返し切れる自信もなかったし、躊躇もしたが、もうやるしかない。父に頭を下げた。

小池製作所、誕生だ。

実家の庭先のプレハブだったけれど、看板だけは大きくしておいた。

小池は、自室でやっていた頃の何倍も働いた。

好きな釣りも、スキーも、すべて封印して、土日も平日もなく仕事をした。



父から借金をして建設した工場(1978年)

冬場は学生時代の後輩が、深夜に屋根づたいに小池の寝ている部屋までスキーに誘いにくることもあった。

「先輩、いまからスキー行きましょうよ」

「えー、俺いま寝たばかりなんだよ」

そんなときでも、たまにつきあうこともあった。

小池のモットーは「我、力にあらず」。人脈や縁を大切にしてきたおかげで、仕事は人づたいにどんどん舞い込んだ。パートのおばさんも三人から五人と仕事が増えるたびに増えていった。ただ自分の給料は、パートの給料や設備投資など、必要経費を払い終わった一番最後だったため、満足のいくお金を手にできたなと思えるまでは五年、六年かかった。

様々な支払いを終え、手元に少しでもお金が残れば喜びいさんで呑みに行き、ストレスを発散させた。しかし、どんなに困ったときでも、ヤシカ時代の退職金九〇万円は銀行に預けたまま、一円も手をつけることはなかった。

それはお守りか、保険か、まるで臥薪嘗胆のキモかのように、ずっと心の中に眠らせておいた。「俺には、あの九〇万円があるから、大丈夫、大丈夫。独立したことを反対するモノ、非難したモノに後ろ指さされたくない」という思いが常にあった。そしてこの頃には最初の借金、つまり父親から借りた三〇〇万円も耳を揃えて返済できていた。

そんな頃、ヤシカ時代の上司から電話が入った。親戚筋のプリント基板会社から呼ばれて現在役員をしているのだが、今、非常に忙しいので手伝ってもらえないだろうかという内容だった。

一般的に、時計、カメラ等の労働集約型産業も、物量的アップダウンが激しかったことと、小池自身は電子部品の知識がないため、迷惑をかけてはならないと思い断ろうと考えた。しかし、自社の社員数人を一定期間実習させることを了承してもらえたので、引き受けることにした。

寝ること、食べること。それ以外は仕事づけだった小池に、ビジネスの女神は微笑んだ。



有限会社コイケ精工設立時のメンバー（後列右端が妻・敬子）上伊那郡箕輪町大字中箕輪11372-1（1978年）

独立したときに結婚した、実習メンバーのメインであった妻・敬子の輝いた瞳と、まわりの人を元気づける明るい笑顔が、今も頭の中に鮮明な記憶として残っている。今振り返っても、感謝の気持ちでいっぱいだ。女神は、小池の隣にいる妻だったのだ。

実習メンバー全員の覚えが早く、仕事が正確だとの好評価のもと、実習完了の頃には時代の波に乗って大量生産が必要とされていた。プリント基板の仕事が定期で入るようになっていた。

小池は決断した。ちゃんと、会社と工場を作ろう。

昭和六十一年、五月。社員一八人、有限会社 コイケ精工が新たにスタートした。

小池、三六歳の春だった。

このとき工場建設に必要な経費は、土地及び社屋を含めて約四〇〇〇万円だった。この資金をどのように彼は捻出したのか。

当時は円高不況の時節がら、商工会職員とたずねたのが中小公庫。



結婚式のパンフレットに使用 於 下伊那郡阿智村駒馬(1980年)

しかしみごとに門前払いだったため、後日、伊那市にある国民金融公庫へ出向いたところ十分な担保があれば貸付OKの所見をもらえた。

十分な担保。それは、小池が一八歳の冬まで遡る。

先述したが、大学に行きたかった小池が、先祖から受け継いだ土地を売って学費にして欲しいと父親に頼んだが、断られたことがあった。その九〇〇坪の土地を、父親が担保にしてもいいと言ってくれたのだった。

まさに人生のアヤだよな、と小池はいま振り返ってもその巡りあわせ、タイミングに、感慨深いものを感じるという。

この時を知るよしもない過去の父親と息子。なのに、まるでこうなることを予見していたかのようだ。

銀行からはこの広大な土地を担保に二五年ローンで四〇〇〇万円ほど借り、小池は念願の工場・社屋を建設した。

製造業の潮流に乗り、コイケ精工のプリント基板は、人づて、クチコミで広がり全国から受注が入ってきた。

プリント基板はファックス機、コピー機などのOA機器をはじめ、洗浄機能付き便器などあらゆる電子センサー制御のものに内蔵されていたため、需要が多く工場も社員も忙しく稼働した。

二五年という長期ローンも、繰上げ返済を常に行い、一八年で完済。登記簿謄本の担保条項を削除し、綺麗になった謄本を「ありがとうございます」と父に提示したときは感慨深いものがあった。



次女知子の初節句(1985年)



塩尻へぶどう狩り(1983年)



於 東京旅行 新宿京王プラザホテル(1982年)

仕事も軌道にのってきた矢先、小池が四五歳のときだった。

自宅を新築した翌年の一月に、自宅の風呂場で母親が脳出血で倒れた。

そのまま救急車で運ばれて入院した。退院後も自力では体が動かさなくなったため、妻敬子に長男の嫁として介護をしてほしいと懇願した。

最初は車いすに座らせても首も座らないような状態で、敬子は自信が持てないと不安がっていた。しかし、休日には娘二人も助けてくれ、率先して面倒を見てくれた。

そんな皆の献身的な看病の末、一二年後の一二月に駒ヶ根病院で帰らぬ人となった。

一二年間という長きに渡り、自分の母親の面倒を見てくれた敬子に、どう恩返しができるかを思案したが、なかなか答えが見つからなかった。

とりあえずは、相続のときに、三姉妹から請求のあった同額を、ご苦労様でしたという感謝の気持ちを込めて、敬子に手渡した。



故 姉で長女の清子(1946年頃)

小池はいつも母親の身を案じながらも、工場の稼働を絶やさず、信頼を落とさないよう、様々な設備投資や改善を試み続けた。

納期に間に合うよう進んでいるか、また、クオリティに少しでも気になることがあったら、夜中の二時に起き出して、ひとりで工場へ確認しにくくこともあった。

ヤシカ時代には分単位で稼働効率が上がるか否かの試算をしていたこともあったので、それが知らず知らずのうちに役に立っていたのかもしれないと振り返る。

さらに、もうひとつ、うちの家族に関する昔話もしていいかな、と語りだした。

実は自分には三歳で命を落とした姉がいる。両親は長女の不慮の事故死という悲しみにくれて、とても仕事も手につかず、しばらく呆然としていたらしい。しかし近所の年寄りが、まだ若いんだから、何人も作ったらいい、元気を出せと言ってくれたのをよく覚えている、と両親が話して

くれた。のちに父と母の間には自分を含めた四人の子宝に恵まれた。



七五三のお祝 於 南宮神社(1954年)



グランコート箕輪 2006年4月竣工



父母の金婚式 於 伊那市の日本料理店(1990年)

でも、時々、その長女清子の、わずか三歳でこの世を去らなければならなかったという無念さに思いを廻らせると、想像を絶するのだった。

そんな彼女の生きたかったという思いが、長男の自分に取りうつてくれているのではないかと思っている。

父と母を幸せにしてほしいと、自分によりそってくれているから、自力以上の幸運をもたらしてくれているのだと思う。だから、経営していくうえで判断に迷ったり、決断をせまられたときは、清子のお墓へ行って線香をあげて手を合わせていた。

小池は先祖や、幼くしてなくなった姉にも感謝の気持ちを持ちながら、奮闘を続け、工場業務を任せる工員を雇う仕事を進めていく中で、人材派遣の会社も設立することになる。

そのパートや社員のために住むところも考えるようになり、気づけば不動産会社もつくっていた。

新聞配達をしていた少年が、たった一代で四つの会社の代表になる。

「色々と周りの環境は変わるよね。家も、土地を買って、新しく建てたりしたからかな。」

お金を貸してください、やら、政治家がパーティ券を買ってくださいとか、あやうく長野県内の新聞で、長者番付にのりそうになったり、経験したことのない面倒なことも舞い込んできたよ」

「でもね…」と一呼吸おいた。

「仕事をしていくうえで社長だろうと新人だろうと関係なく大切なことが、ひとつある。

それは、他人から情報をもらいやすい状態、環境にしておくことなんだ。

つまり話しかけやすい、声をかけやすいよう、その醸し出す雰囲気自分自身で身につけておくことが必須だよね」



知子(次女)と夫の英孝(結婚式2016年)

「仕事っていうものはね、人様が運んでくれるものなんだよ」
それを象徴するのが、小池が人材派遣会社を設立することになった、とある。きっかけだ。

コイケ精工を円満退社したA氏は、NEC長野へ転職した。その後NEC長野では一〇〇人規模の希望退職者が出たため、そのA氏が、彼らをコイケ精工で使ってくれないかと相談しに来社したのだった。

「もし小池社長のところで空きがなければ、社長の知り合いの会社にも聞いてもらえませんか」

「そっか、わかった。じゃあヤシカ時代の元上司が辰野にある会社で人事部長しているから聞いてみるよ」とふたつ返事で受けあった。

小池が連絡を入れてみると、その工場ですぐに一〇名ほど人手が欲しいと連絡がきた。

すると、面接に行った一二名全員が合格。いつから働けるか、明日からでも来てほしいという状況だった。

「辰野にはそれほどアパートもないから、箕輪周辺で手配して欲しい」、さらには「送迎用のライトバンも用意して欲しい」などと色々トリクエストが入ったため、えいやつという勢いで、人材派遣会社をつくることになった。

それまでは、人材派遣などやるつもりもなかったのだが、これを機に開業し、のちに一〇億〜一二億円の年商に発展する事業になった。

声をかけられやすいオーラが出るよう心がけている小池の、象徴的エピソードである。

現在のこと。 未来のこと。

一代でここまでの会社をつくれたことの誇り。

娘や孫の代まで、しっかりと自立できる会社であり続けて欲しいという願い。今、小池の胸には様々な想いが去来している。

コイケ精工をどうしていくのか、自分自身をどうしていくのか。

独立したての時からずっと自分を支えてくれた妻と、娘たち家族の未来をどう描いていくのか。

現在六九歳の小池の一日は、まず朝八時半に会社に行くことから始まる。工場自体のラインの確認や、社員一人ひとりの様子など、コアな部分を確認し、納期について、経理について、あらゆることに目を配る。昼ごはんを済ませて、明日の予定を確認しながらまた工場稼働も確認し、一五時過ぎには家に帰る。

さすが社長というような、余裕のある生活に感じられるがそうではない。自分の会社以外に、小池は体の許すかぎり、地域のボランティアや様々な団体の役員やリーダーなどにも積極的にコミットしている。





そのひとつが、箕輪町を流れる天竜川を中心とした地域活性プロジェクトのボランティア活動である。天竜川は水源を諏訪湖とし、長野県から愛知県、静岡県を経て太平洋へ注ぐ天竜川水系の本流で、一級河川のひとつ。流路延長は二一三km、流域面積は五〇九〇km²を誇る。小さい頃から、この悠々とした川の流れを眺めながら育った小池にとって、地方創生の舞台はこの天竜川だという確信があった。

「天竜健康ウォーク」では、地域を巻き込んだ五〇〇人〜一〇〇〇人規模でのウォーキング大会を会長として運営。さらには箕輪町にランニングサークルを作って参加したり、災害時に備えた護岸利活用の会を発足したり、小池が参画しているものだけでも七つ以上のプロジェクトがある。

そのほかにも箕輪ブライトプロジェクトという、ソーラー式の街灯を川岸に取り付けていく事業にも参画している。なぜ、自社の経営が多忙を極めるのに、そこまでボランティアにも時間を割くのか。それは、国や行政が地方創生を謳う前から、若者の都会への流出が気になっていたからだ。



「天竜せせらぎロードプロジェクト」により、箕輪町天竜川沿いにある護岸の利活用のため舗装された川沿いの道(2018年5月25日)



災害時の電力供給を目的としたソーラー式の街灯「あいテラス」(2018年8月4日)

〃何かをやるうとしている。何かをはじめようとしている。

そういう意志を地域が示すことで、たとえ都会の大学へ進学しても、就職のときに戻ってきてくれるのではないか、という気持ちがあったという。

箕輪町で生まれ育った小池は、心からこの地元を愛しているがゆえに、若者が減っていくこと、過疎化していくことを黙って見ていられないという気持ちがあるのだ。

小池がボランティアを始めて一〇年以上経過しているが、年々参加してくれる人、スタッフとして協力してくれる人が増えていることが、たまたまなく嬉しいという。

「人脈を感じるよね」とヤシカを辞めて独立した当時を振り返ったときにも、小池が繰り返し言っていた言葉だ。

また、ずっとボランティアを続けていると、様々なアイデアが生まれるという。箕輪町で買い物をするとポイントが貯まるカードがあるが、ボランティアに参加した人にもそのポイントが貯まるようにしてリンクをす



れば、もっと参加してくれる人も増えるし、店を経営する側も嬉しいのではと、町長に進言したこともあるという。実際に、箕輪町で買い物をしたときのポイントで、住民票をもらうときなどの料金がそれでまかなえるというサービスも実現している。さらには、小池は壮大な夢をぼつりと言う。



於 伊那プリンスホテル
箕輪地区しんきん経営者の会の新年会でのあいさつ(2014年)

「本当はさ、全国の各地域でボランティアに参加した人にはポイントが貯まって、それが全国共通で使えたらいいのになあと思うよ」
思わず、国のトップに聞かせたくなる素晴らしいアイデアだ。
小池が今、想いを寄せていることは、自分の会社、地域のこと、そしてなんとといっても家族と、この日本のことだ。家族々と日本々という、スケールに差があり過ぎると感じるが、小池にとってはどちらも同じ視座にある。
平成三十年六月末に働き方改革法案が可決されたが、小池はこの法律の下での日本の行く末を危惧しているという。



小池邸1997年竣工



長女(ゆかり)、次女(知子)七五三記念撮影(1988年)

「国が、働くことに関して口を出すっていうのはどうなんだろう。いい車に乗りたいたくさん稼ぎたいとか、でっかい家を建てたいからたくさん稼ぎたいって、その自由も奪われてしまうのかね。会社勤めで、過労死の目に遭ってしまった人は本当に気の毒だけれど、そうなる前に自分で声をあげたり、勇気を持って辞めるという選択もあるし。子供も減って、人口も減って、働くことも減らしていったら日本はどうなっていくんだろうね。安倍さんしっかりしてくれよってね。俺は四〇代前半でこの家を建てたけど、貧乏だった俺でもこんなふうに家が建てられたっていうのは、少なからず誰かに夢を与えられるんじゃないかと思うんだよね」

まさに、日本が戦後、高度成長期を経て繁栄していったときに、馬車馬のように働いていた小池世代からすると、今の国の舵取りに一抹の不安を感じるのだという。

そして、家族のこと——二人目の孫が生まれたばかりで、その子の泣き声が書斎まで時々聞こえてきていた。



孫の雄真が這いずり出した頃(2015年9月23日)

雄真くん三歳と、晴花ちゃん〇歳。この二人のことを考えると、二〇五〇年問題というワードを検索してしまうという。国や総研の試算によれば、二〇五〇年の日本は、GDPは世界で九位となり、アジアの中心は、中国・インド・東南アジアの各国にとって代わられているという。経済力も発言力も失った日本はどうなっているのだろう。

小池は未来に思いを馳せた目をして語る。平成の後期に生まれた孫世代は、大人になったときには貧困に耐え忍び、助け合うことが必要になってくるのではないかと思う。健やかに、素直に成長していつてほしい。さらに、遅しく、思いやりにあふれ、気遣いのできる優しい人間に成長していつてもらいたいと、心の底から願わずにはいられない。自分は現在六九歳。孫たちに何を伝え、あと何年、ともに暮らすことができるのか。心筋梗塞で足に麻痺が残り、体が思うように動かなくなった今。

あと、どのくらい生きられるのか、という問いかけが頭をよぎることが以前と比べて多くなった。

この世に生まれ、生きることを得たすべての人が平等に通らねばならない様々なプロセスの中で、さらなる自分自身の精神的成長をどう成し得るのか、自身の精神的終焉をどう迎えるのか。どう整理するのか。そんな感う日々の中でも、ビジネス面では裸一貫で築きあげた意欲は健在だと断言できる。

いい仕事しているのに、後継者のいない工場が会社をたたんでしまうなら、M&Aという合併や買収をして立て直したいという野望もあるし、不動産も、これだと思う物件があれば、購入したいという思いもある。

現在、策定中のコイケ精工五カ年計画及び一〇年計画がある。それを実現化につなげて生き残りをかけるつもりだ。

小池は年齢的には高齢者かもしれないが、その思考回路、視野の広さ、ペースとなるマインドは、今の若きIT社長たちとなんら変わりのない、野心家のままだ。

【学 歴】

昭和31年(1956)04月 箕輪町立箕輪中部小学校 入学
 昭和37年(1962)03月 箕輪町立箕輪中部小学校 卒業
 昭和37年(1962)04月 箕輪町立箕輪中学校 入学
 昭和40年(1965)03月 箕輪町立箕輪中学校 卒業
 昭和40年(1965)04月 長野県立箕輪工業高等学校機械科 入学
 昭和43年(1968)03月 長野県立箕輪工業高等学校機械科 卒業

【職 歴】

昭和43年(1968)04月 株式会社ヤシカ 諏訪工場入社
 昭和52年(1977)10月 株式会社ヤシカ 諏訪工場退社
 昭和53年(1978)05月 小池製作所 創業
 昭和61年(1986)05月 有限会社コイケ精工 設立
 平成02年(1990)02月 株式会社長野テック 設立
 平成08年(1996)07月 厚生労働省 一般労働者派遣事業に登録
 平成09年(1997)09月 長野スタッフサービス 設立
 平成09年(1997)12月 小泉構造改革の規制緩和に伴い、人材派遣業創業
 平成18年(2006) 株式会社長野テックにて、賃貸アパート2棟建設
 平成23年(2011)10月 一般労働者派遣事業及び業務請負事業を同業他社へ引渡し、派遣事業より撤退
 平成25年(2013)03月 不動産賃貸業として 株式会社長野プランニング を設立
 平成25年(2013)04月 長野スタッフサービス、長野テック、長野プランニングの3社を長野プランニングに一本化(3社グループ税制にて長野プランニングに合併)

【ボランティア】(現在)

平成14年(2002) アルプス中央信用金庫 総代就任
 平成18年(2006)08月 箕輪ブライトプロジェクト 創業設立者として発足
 平成18年(2006)06月 箕輪せせらぎロードプロジェクト 創業設立者として発足
 平成19年(2007)10月 天竜健康ウォークの創業設立者としてイベントを開始(第1回 天竜健康ウォーク)
 平成21年(2009)06月 箕輪ブライトプロジェクトを「箕輪エコエコ研究会」として再発足
 平成24年(2012)06月 箕輪地区しんきん経営者の会 会長就任(1期2年)
 平成27年(2015) 箕輪未来委員選任、地方創生、箕輪町の人口対策の立案
 平成28年(2016)05月 箕輪地区しんきん経営者の会 会長解任(至:2期4年)



2018年7月14日



2018年7月14日 取材時



全日本スキー連盟公認 スキー準指導員公認証
(2016年)

エピソード

小池のエピソードにふさわしい方にご登場いただく。

宮島氏。小池と高校が同じで、陸上部の一年後輩。

一緒に汗を流した仲間の一人だ。

長年勤めた会社を定年退職し、今はスポーツやボランティアに勤しんでいる。

小池が自分史を作ると聞いてどう思ったか尋ねると、

「やっぱりね、みんなと違うなーと思ったよ。彼にはいつだって野望がある。

普通の人がめんどくさいなと思ったことも、やってしまっただ。

昔から何でもトライする性格だったよ。だから、驚かないよ。」

と言ってにこやかに微笑んだ。

高校を卒業して勤めはじめたときも、岡谷まで行く通勤電車が一緒だった。

お互い仕事が忙しくなり、疎遠になってしまっただ時代もあった。

「風の噂でヤシカを辞めて、社長になったらしいと聞いたときは、社長なんて、すごいなと遠い存在に感じてしまい、連絡しづらかったこともあったな。」

と吐露した。

一方で小池は、「彼のようにひとつの会社を辞めず勤めあげるということは俺にはできない、尊敬するなあ。」と言う。

今はまた、互いの趣味であるスキーを通じて親交が深まり、一緒に地元の子供たちにスキーを教えている。

小池にとってスキーは特別なスポーツだ。子供の頃から得意だったが、会社創業時に封印していた。でもリーマンショックを契機に攻めの経営から一呼吸入る判断のもとに、二三年ぶりに再始動していた。若い頃に取得していた一級の合格証も紛失していたため資格も取り直し、現在はスキー準指導員の資格も持っている。今の願いは足の麻痺を完全に克服して、孫の雄真くんと晴花ちゃんにスキーを教えることだ。

お二人に、未来の子孫たち・後輩たちへのメッセージをお願いすると、口を揃えて言った。

「とにかく、何歳になっても目の前のことを一生懸命やることが大切だよな。」
それは、家族たちはもちろん、地元の子供たちにも熱く伝わっているだろう。

日出ずる、信濃から

2019年4月1日 第1版30部発行

発行人 人となり 池田道信
編集・デザイン 有限会社ブレイドデザイン 宮澤孝博
取材・文 坂本順子
撮影 池田道信
印刷 株式会社アスカネット
発行 人となり
〒251-0031 神奈川県藤沢市鵠沼藤が谷 2-7-3
Tel. 0466-65-3878 / Fax. 0466-65-3879
URL: <http://www.hitotonari.jp/> E-mail: info@hitotonari.jp
協力 有限会社 コイケ精工/宮島 勇/小池家の親族方々

<http://www.hitotonari.jp/>

Produced by Hitotonari

